

I 研究について

1 本校の実態と課題について

本校では、「自分用のスマートフォンを持っている」と答えた生徒が全体の62%を占めており、特にゲームや動画視聴を目的として使用する生徒が多い。しかし、そのような状況で、架空請求による詐欺やSNSでの悪口、誹謗中傷、個人情報の流出など、メディア利用によるリスクを知る生徒は多いものの、回避方法について具体的に答えることができない生徒が多い。以上のことから、生徒がメディア利用の際のリスクマネジメントを学び、安全に運用できる力を養うことが喫緊の課題であると考えられる。

2 手立てについて

本校では、実態や課題を踏まえ、研究テーマを「危険を予測し被害を予防するとともに、メディアを安全に使うための知識・技能を身につける情報モラル教育の在り方の研究」と設定した。ICT 機器やアプリ・ツールを駆使したりカード比較分類法を活用したりすることで、生徒がメディアを使う際に起こりうるトラブルを正しく知り、的確に回避・対処する方法を学ぶ機会を提供できるよう授業を計画した。

3 実践計画について

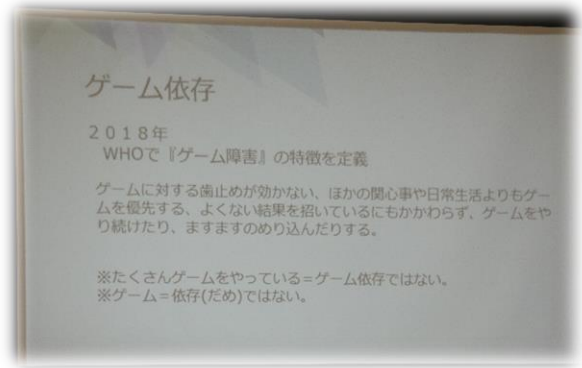
時 期	実 施 内 容
5月23日	第1回情報モラル教育 校内研修会「研究テーマ・研究の進め方について」
7月19日	外部講師による情報モラル講演会
8月25日	第2回情報モラル教育 校内研修会「2学期の取り組みについて」
9月 下旬	校内研修「各学年の実践報告・カード分類比較法」について
10月 4日	第1回 校内授業研究会(第3学年 学級活動(2))
12月 6日	第2回 校内授業研究会(第2学年 学級活動(2))
12月23日	第3回情報モラル教育 校内研修会「実践のまとめについて」

Ⅱ 研究の実際について

1 校内での実践

(1) 外部講師による情報モラル講演会（7月19日 全学年で実施）

いわき東警察署の方に、ネット上でのトラブルについて、その危険性をテーマにご講話いただいた。特に今回は、小中学生の被害者が増加している、SNS を利用したいじめ問題やわいせつ被害について詳しい話をいただいた。このような問題は、誰にでも起こりうることである。江名中学校の生徒は、SNS 等を利用する際の危険性について知る生徒も多い。しかし、トラブル後の生活や、家族や友人などへの影響まで想像できていた生徒は少なかった。その点を重点的にご講話いただいたため、トラブルの未然防止のために、どのような心がけや対策が出来るのかということについて考える機会となった。



(2) 第2学年 カード比較分類法（基本編）を用いた授業（9月下旬に実施）



情報モラル教育の取り掛かりとして、LINE 未来財団提供の教材である、カード比較分類法の「基本編」に取り組んだ。グループワーク等で自分の意見を発表しながら、どんな言葉や態度が相手に不信感を与えるのかを考え、自分と相手との間には認識の違いがあることを学ぶことができた。

2 校内授業研究会での実践等

(1) 第3学年 学級活動(2)「相手との認識の ずれ の把握」の実際

本時では、「遅い時間とは何時なのか?」、「返信をどれくらい待てるか?」など、自分と相手にある考え方や捉え方の ずれ を意識させた上で、スマートフォンなどのメディアとの上手な付き合い方を「メディア宣言」としてまとめさせた。

①自分の「型」を知る。

導入では、生徒にクイズ形式で質問し、スマートフォンなどメディアを使う上で自分がどんな使い方をしてしまうのか確認することで、自己理解を深めさせた。「型」は、「依存まっしぐら型」、「優柔不断型」、「自己コントロール型」の3つに分類した。



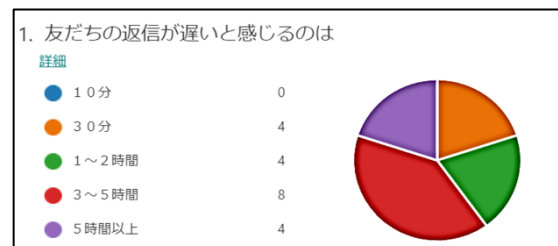
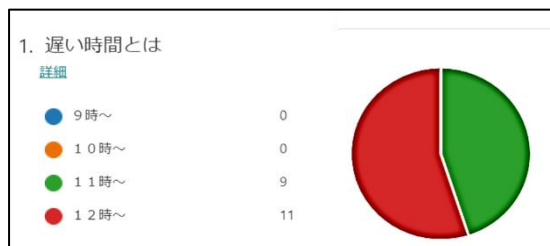
②個人でメディア宣言を検討する。

自分の「型」を把握した上で、まずは個人でどんなことに気を付けるとよいかについて考えさせた。生徒からは、「夜遅くまで動画を見ない」や「きりのよいところで終わるようにメッセージのやりとりをする」など、具体性に乏しく曖昧な宣言が多く挙げられた。



③ICTを活用し、相手との ずれ を認識する。

次に、他者との考え方の ずれ を認識させるため、MicrosoftのFormsを使用した。Formsは、アンケート内容を瞬時に集約し、円グラフなど視覚的にわかりやすくまとめるため、効率よく ずれ を捉えられやすいと考え活用した。



上の2つのグラフより、「遅い時間」について質問した際はほぼ半分に分かれたが、「返信が遅いと感じる時間」についての質問では、意見が大きく分かれた。

④自分のメディア宣言を見直し、再考する。



自分と他者には考え方や捉え方の ずれ があることを認識した上で、改めてメディア宣言を考えさせた。その中で、相手にとっての遅い時間を考えたり、相手の都合を考えて連絡を取ろうとしたりする宣言が見られた。 自己中心的にメディアと付き合うのではなく、相手のことも考えた使い方を模索しようとする姿が見られた。

(2) 第2学年 学級活動 (2) 「リスクを予測したコミュニケーション」の実際

第3学年の実践を経て、自分にとっても相手にとっても、よりよくコミュニケーションをとるために、どのような意識が必要かを考えることに重点を置いた授業を計画した。

①GoogleJamborad を活用し生徒の思考を可視化する。

本時は、カード比較分類法の「リスク見積もり編」の教材を活用し、SNS 上では、どのようなコミュニケーションが他者とトラブルを生んでしまうのか考えるところからスタートした。右の資料のように、Jamborad 上でグループトークの例をトラブルになりそうな順に並びかえさせた。これにより、生徒がどのようなポイントに注目しているかを見取るとともに、どんな些細なやりとりであってもトラブルのきっかけになってしまうことを共有した。

	トラブルになりやすい ← → トラブルになりにくい				
氏名 十 百 ハ					
氏名 タ ト					
氏名 ハ シ					
氏名 井					

このように、Jamborad 上でグループトークの例をトラブルになりそうな順に並びかえさせた。これにより、生徒がどのようなポイントに注目しているかを見取るとともに、どんな些細なやりとりであってもトラブルのきっかけになってしまうことを共有した。

②Google Forms を活用し意見交流を行う。

トラブルが起きそうなグループトークの中で、最も多く選ばれたものが右のグループトークであった。さらに、このトークの中で、最もトラブルを生む可能性が高い投稿をしているキャラクターを、Google Forms を活用し投票させた。多くの票を集めたのが、画像を投稿した「かえる」だったが、「うさぎ」や「あひる」の投稿に疑問を感じる生徒もいた。相手の受け取り方によっては、どんな内容であっても、トラブルの火種になってしまう ということを共有するとともに、メッセージを送る側・受ける側、それぞれの立場に立って考えることが重要であると学ぶことができた。



(3) 研究協議会の様子

指導助言者・・・・・・・・・・・・・・・・・・医療創生大学心理学部 教授 中尾 剛 様

〈指導助言について〉

・SNS上の会話では、相手の顔が見える見えないだけでなく、記録が残ってしまうという特性がある。そのため、書き込みについては責任をもつ必要がある。

・子どもは限られた集団で生活しているため、ネット環境に依存しやすい。そのため、親など周囲が決めたルールを守らせる「他律」から、自ら考えて行動する「自律」への転換が必要である。



Ⅲ 成果と課題について

1 成果

- 授業実践を通して、自分と相手とでは受け取り方や考え方にずれが生じてしまうことに気づき、伝え方を意識しようとする生徒が見られるようになった。
- ICTと紐付けた授業を行うことで視覚的に情報を共有し、より具体的な場面を想定しながら学び合うことができ、本校の実態に沿った実践となった。
- 生徒だけでなく、教員も様々な資料や書籍をとおして、情報モラル教育に関する様々な視点を学び、授業実践として生かすことができた。

2 課題

- 今年1年間の成果を生かし、中学校3年間を見通した情報モラル教育の在り方を検討し、学校全体で取り組めるようにする。具体的には、総合的な学習の時間や学級活動、道徳科の時間を中心に、教科横断的に取り組めるよう教育課程に位置付ける。
- 単発の授業実践で終わらせることなく、生徒が日頃から情報モラルについて学ぶ機会が必要である。ICT機器を活用することで、理論だけでなく実践にも生かしやすい学びを提供する。
- 学校の中だけで完結するのではなく、保護者との連携も必須である。学年・学級通信やホームページ等で学校での情報モラル教育の取り組みを周知し、学校と家庭が足並みを揃えて指導に当たれるようにする。

IV 参考文献・参考 URL

一般財団法人 LINE みらい財団 情報モラル教育教材. <https://line-mirai.org/ja/download/>,

(参照 2023-03-01) .

「楽しいコミュニケーションを考えよう！基本編」

「楽しいコミュニケーションを考えよう！リスクの見積編」

今度珠美・稲垣俊介（2017）. 「スマホ世代の子どものための情報活用能力を育む情報モラルの授業 2.0」. 日本標準.

イーディーエル株式会社（2020）. 「今すぐ使える! Google for Education 授業・校務で使える活用のコツと実践ガイド」. 技術評論社.